

杭州雷峰塔遺跡及び地宮の考古発掘と出土文物

黎 毓馨 (LI Yu-xin) 浙江省博物館歴史文物部主任

主な著書・論文

- ・『天覆地載 雷峰塔天宮阿育王塔特展』(中國文化藝術出版社、2009 年)
- ・『雷峰塔遺址』(文物出版社、2005 年)
- ・『雷峰遺珍』(文物出版社、2002 年)
- ・「杭州雷峰塔遺址考古發掘及意義」(『中國歷史文物』2002 年第 5 期)

文献や出土石刻の考証によれば、雷峰塔は吳越国王錢俶が「仏螺髻髮」を供養せんが為に建立し、初め皇妃塔と名づけたものである。壬申年(北宋開宝五年、972 年)に着工し、977 年初めに完成している。翌年吳越王は宋に帰順した。遺跡は、浙江杭州の西湖南岸の夕照山東側、南に浄慈寺まで僅か 100 メートルの場所に位置し、1924 年 9 月 25 日雷峰塔倒壊後に形成された廢墟の堆積であり、2000 ~ 2001 年、遺跡及び地宮について考古発掘がなされ、面積にして 4000 平方メートル近くを明るみに出した。発掘の結果から、雷峰塔の塔基・塔身低層の一部の保存状態は比較的良好であること、地宮は完全に保存されていること、いずれも五代吳越国末年の遺構であることが明らかとなった。遺跡中から大量の石経・銘文磚・建築材及び仏教器物が出土し、地宮内からは 70 件余りの貴重な文物が出土した。

塔基は八角形の版築の土台を築き、各辺に礎石を 4 個置き、外縁は磚と切石で覆い、その直径は 43 メートル、高さは地面から 1.2 ~ 2.5 メートルである。塔身の直径は 25 メートルあり、二重の筒形構造で回廊を具えるのは杭州の六和塔・蘇州の虎丘塔と同じで、吳越国後期の典型的な仏塔構造である。外壁・回廊・内壁・塔心室の四部分から構成され、内・外壁には磚を用い、黄泥を用いて貼り合わせている。外壁の外縁は辺ごとに長さ 10 メートル、中央に一門を開き、その幅は 2.2 メートル、奥行き 4.2 メートルである。回廊は幅 1.8 ~ 2.3 メートルある。内壁は四面にそれぞれ一門を開き、奥行き 3.7 メートルである。塔心室が中央に位置し、直径 4.6 ~ 5.3 メートルである。地宮は塔心室の中央、地表から 2.6 メートルの深さの塔基中にあり、方形竪穴式で辺は長さ 0.6 メートル、深さ 0.72 メートル、四壁と底部は磚を用い、表面には石灰が塗ってある。地宮口は辺の長さ 0.92 メートル、厚さ 0.13 メートルの方形の石蓋板を用いて頂きを覆ってある。

雷峰塔遺跡では 1100 件余りの石経残欠が出土した。そのうち大部分が唐・実叉難陀新訳の『大方広華嚴経』であり、一部は姚秦・鳩摩羅什訳の『金剛般若波羅蜜経』である。また吳越王錢俶自筆の『華嚴経跋』及び南宋慶元年間に雷峰塔を重修した際の「慶元修創記」等の重要石刻も発見された。一方、出土した仏教器物は、内に金瓶を下げた純銀の阿育王塔・小型金銅造像及び石菩薩頭、またそれらとともに発見された「開元通宝」の銅銭や吳越国王銘の鉄板のように、金・銀・銅・鉄・陶・石等の多種の材質がみられた。出土位置から判断すると、銀の阿育王塔は元來塔最上層の天宮内に置かれたもの、その他の多くは壁龕に安置されたもので、いずれも明らかな唐五代の特徴をもち、雷峰塔建立当初に入れられたものである。磚は、最も多く見られるのは長さ 37 センチメートル、幅 18 センチメートル、厚さ 6 センチメートルの長方形のもので、端面の型押しによる陽刻銘は総計 160 余種にのぼる。銘の内容は多くは寄進者の郷里・氏名であるが、「官」「王」「天下」「西関」等の銘や「辛未」(971 年)、「壬申」(972 年)等の紀年もある。

地宮内から出土した器物には 77 件の通し番号がふられたが、多くは鉄函の中に大切にいられてきたものである。鉄函の下や磚壁との空隙には大量の銅銭と多種の材質の供養品が積まれていた。西北壁に貼り付くように高さ 68 センチメートルの鍍金の金銅坐像一尊が置かれ、その他の三壁には

鍍金の小銅仏・毘沙門天像が貼り付いていた。出土物にはその他にも、銀製鍍金の腰帯・銀製臂釧・銅鏡・漆製釧・漆箔製台座及び玉・メノウ・瑠璃など七宝を象徴する小さな装飾品があった。銅銭は3000枚余り30種類近く、うち「開元通宝」が多数を占め、鍍金・鍍銀のものも見られ、また玉製の「開元通宝」も1枚発見された。鉄函内には銀製鍍金透かし彫り盤・盒・阿育王塔・腰帯等金銀器及びガラス瓶・方形銅鏡等があり、そのうち高さ36センチメートルの純銀製阿育王塔は塔座・塔身・隅飾・塔刹等から構成されて、方形塔身の四面に仏の本生譚が彫刻され、中心には「仏螺髻髮」を納める金棺があり、隅飾には仏伝を表し、その造形は五代・両宋時代の呉越国内によく見られる銅鉄阿育王塔と似ている。地宮内にはその他にも幾多の経巻・絹織物等の有機質の文物の残欠があったが、早くから水に浸ってしまっていたために保存状況はよくない。

雷峰塔地宮は現在唯一確定している五代時代の仏塔地宮であり、南方地域の土坑竪穴式地宮の典型的代表である。地宮内から出土した文物等は、等級高く製作技術は精緻であり、呉越国の金銀器・玉器・銅器製作の技術水準が比較的高く独自の境地に達していたことをしめしており、新発見のものや、同様の題材の中で最古のものが含まれている。雷峰塔地宮内で発見された舍利を納める金棺銀塔は、唐宋時代に金棺銀槨を用いて舍利を埋蔵することの例証である。雷峰塔遺跡及び地宮の考古発掘は、雷峰塔の本来の姿を明らかにし、五代時代の仏塔構造・地宮構造・寺院構造を研究し呉越国末期の歴史背景・仏教文化・工芸水準を理解するための得難い一次資料を提供したのである。

(翻訳 鈴木桂)